

2倍の性能、半分のコストで高いシェアを確保する偽札鑑別機などを開発・製造

～株式会社松村エンジニアリング(浅草橋支店お取引先)～

紙幣や本人確認書類の鑑別機は市場としてはさほど大きくはありませんが、大手の電子機器系メーカー数社を含め、10社前後のメーカーがあります。

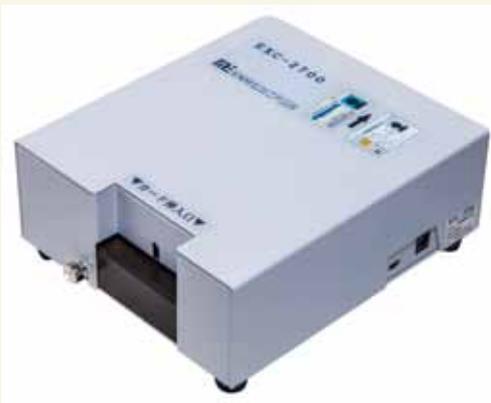
その中で中小企業ながら高いシェアを確保している、株式会社松村エンジニアリング（CEO：松村喜秀氏、本社：台東区柳橋、資本金：1,000万円、従業員：20名）をご紹介します。

(1) 偽造100ドル紙幣の鑑別機で一躍有名に

同社を一躍有名にしたのが、約20年前に東南アジアを中心に回った偽造100ドル紙幣の鑑別機を世に出した時です。当時は偽造紙幣が数兆円規模で回っており、その精巧さから某国ぐるみの偽造と推定され、鑑別に困難を極めていました。この偽札「スーパーK」の問題を解決したのが、同社の鑑別機でした。米捜査当局が苦労していた問題を解決したことで、2005年10月号のニューズウィーク誌の特集「世界が尊敬する日本人100人」の一人に松村氏が選ばれています。

同社はFA（ファクトリーオートメーション）工場向けの産業用ロボットを開発・製造していた現CEOの松村喜秀氏が昭和63年に設立しました。

産業用ロボットで使われている光学センサー技術を鑑別機に応用したのです。ちょうど、韓国でソウルオリンピックが開かれた時期であり、韓国に海外から入ってくる偽札を鑑別するために多くの鑑別機が必要になり、順調に売上を伸ばしました。しかし、需要も一巡し、より高精度な製品が求められ、2年がかりで開発したのが、前述の「スーパーK」を識別できる鑑別機です。



▲本人確認装置

注目企業情報

(2) 他社製品に対し性能は2倍、コストは2分の1を追求

これは目標というだけではなく、実際に同社の製品は、それと同等以上のパフォーマンスを実現しています。その秘訣は一言で言えば、技術力となりますが、その内容はセンサー技術などを核として、その製品に必要な機能を深堀りして、それを実現するために、創意や工夫を積み重ねたものです。それを仕様やアルゴリズム（プログラムの基礎となる問題の解決方法）に展開しています。例えば、紙幣は発行してから年数がたつと汚れが付いてきて偽札と区別が付きにくくなりますが、それを識別できます。さらに同社の鑑別機以外の主力商品である家の電子錠（NOAKEL）の例ですが、万一壊れても鍵を開けることができます。それは鍵の中にもう一つ鍵が入っていて、その鍵で本体を操作することができるからです。まさに、アイデアと工夫で勝負する中小企業ならではのです。

同社は特許出願も行っていますが、その重要なノウハウの多くは出願せずに、非公開となっています。

開発した鑑別機を上回る偽札作りやコピー商品が出回ることを防ぐためです。

同業が10社程度ある中で大きなシェアを占める一つの理由は大手が同社の製品を自社のブランドで出しているからです。ただし、通常のOEMとは異なり、そこに同社の社名も製造会社として併記される場合が多いほど、独自の製品特長を有しています。

(3) 朝日信用金庫主催の商談会で大手との連携を実現

3月に行われた朝日信用金庫主催の「大手バイヤー商談会2017」へ同社も参加され、それがきっかけで、免許証などの本人確認装置で大手メーカーとの連携を実現したそうです。

社長から読者の皆様へ…

性能2倍、コスト2分の1の製品作りにご興味ある方はご連絡ください。ご参考になるお話ができると幸いです。

(株)中央総合研究所 中小企業診断士 吉村 信行